

新年を迎えて

京都市動物園長 林 田 礼 俣

明けましておめでとうございます。

京都市動物園もお蔭様で、今年の4月で70周年を迎えることになりました。創立当初からしるされた沿革史を見ますと、その永い歳月には随分変遷がみられます。或年は栄光への道を突き走ったよるこびの年もあれば、動物が数えるほどしか飼えなかった苦難の年もありました。

そして今年もいくつかの問題をかかえていますものの決意を新たに京都市政の一環として、市民の皆さんのご期待にそえるよう、職員一同張切って73年の新春を迎えました。

ご承知のようにおし寄せる都市化現象の中にあって動物園は都会のもつオアシスとして、また人間回復の場として新しい企画をとり入れながら、本来の目的である、1.教育 2.レクリエーション 3.研究 4.自然保護の4本柱を土台として、動物園づくりに邁進する覚悟でございます。

昨年1年間をふりかえって、そのうち主なものを拾ってみますと、先ず5月22日には、夫・ジミー、に先立たれた当園のゴリラ・ベベ、が自然保護の立場にたつて一ヶ年の契約結婚のため、上野動物園に旅立ちました。そしてただ今上野動物園のオスゴリラ・ゴクウ、と、私たちの期待を担って仲良く暮らしています。

次に夏季8月1日からの日本動物園水族館週間には市内の小学生を対象にサマースクールを開き、一般入園者にはガイドツアーを行なって、教育活動の第一歩をふみだして好評を受けました。

動物の面では、当園の人気者、ゴリラの子マックのガールフレンドを迎えたのが3月で、9月には市内のよい子たちに名付け親になっていただいた、トラ2頭も仲間入りしました。ベビーの誕生も多く、アシカ、カモシカ、フラミンゴをはじめ、40種、236点が繁殖し、元気に正月を迎えています。

また一方、市内のあちこちで不幸にも傷ついたり、衰弱して市民の方々の善意で動物園に持ち込まれた野生鳥獣も随分ありました。その数は昨年中で、シカ、ツバメ、ヒヨドリなど51種、185点の多きにのぼり、これらの保護された動物たちは大部分動物園で元気を回復し、近くの山野に帰って行くもの、そのまゝ収容動物の仲間入りするもの様々ですが、オオミズナギド

リのように和歌山の海辺まで運ばれ、遅ればせながら南の島へ渡って行ったものもあります。

つい10月のはじめには、船橋市長から沖縄の子供たちに7頭の子ダヌキがプレゼントされ、沖縄子供の国動物園で元気にしております。また「動物園だより」の発刊も昨年スタートの新しい試みでした。

さて、1973年、今年はいし年です。その歩みはのろいかも知れませんが、あの落付きある風格、四肢で大地をどっかりとふまえた力強さはたのしい限りです。動物園もこの動物の年にあやかっ、どしりと腰をすえながら、しかも飛躍の年でありたいとねがっています。

今春には先ずいし年にちなんで、東南広場に有蹄類舎が建てられ、うし科で世界的に貴重な動物、ヨーロッパバイソン（野牛）が入ってまいります。

ヨーロッパバイソンは、日本では1952年にはじめて名古屋動物園にオス1頭がはいり、続いて54年にメスがはいりましたが、さきに入ったオスは59年に死亡し現在1頭しかいない希少動物です。

次に9月には爬虫類館の完成が予定されています。

この動物園に爬虫類館を建てることは、市民の皆さんや、私どもの数年来の念願でしたが、昨年度より2年間の継続事業として、市長の肝入りで建設の運びとなりました。この獣舎の構想は、特に展示効果を上げるための配慮として、前面硝子張り各ケージは動物の自然環境をとりいれることに工夫し、とりわけワニ類などは水中の生活を硝子面とおして見易くし、爬虫類館で日本ではじめての試みとして屋外にプラザを設けるなど動物の健康管理と展示の立体化をはかっています。

昨年完成をみた鳥類のための孵化室も、今年3月頃から一般に公開しつゝ運転を開始し、卵から可愛らしいヒナが誕生する状態や、人工育雛の状態もお見せすることができそうです。

なお、珍らしい動物もどんどん入れ、外国との動物交換なども積極的にとりくみ、教育活動や自然保護の仕事も巾を広げて行きたいと思っています。

そしてこの動物園が、皆さんに愛されて、よき発展をいたしますようお願いしつつ新年のご挨拶といたします。

うし年によせて



今年はうし年です。12年目ごとに子(ね)、丑(うし)、寅(とら)……亥(い)とまわってくるのです。これを十二支とよんでいます。もともと中国に伝わる暦用語で、毎年このように動物と対応させて、したしみやすくしているのです。

広辞苑をひらくと「丑」は十二支の第二記号、北から東へ30度の方角、また現在の午前1～3時の間をいう、とあります。

うしはポピュラーな動物で、人によくしたしまれています。うしにちなんだ古語、ことわざはたくさんありますが、その二、三をあげますと「うしにひかれて善光寺まいり」、「草木もねむる丑三つどき」、「うしのあゆみ」など、また真夏の「土用の丑の日」にうなぎをたべると、夏バテ防止に役立つといえます。

「鬼門^{きもん}」という言葉も年配の人たちからよくききます。これは中国の故事で「東北の海島に百鬼の出入する岩穴がある」といい、丑寅の方位、すなわち東北の角をいい、万事に忌嫌う方位とされて、ここに神仏をまつて災難をさけるような風習があります。

「草木もねむる丑三つどき」ききなれた言葉です。

現在の午前2時20分から3時の間をさす時間のあらわれし法です。1刻(2時間)を上、中、下あるいは一つ、二つ、三つとわけて、丑の下刻とか丑の三つ時などといえます。昔は真夜中をこんな表現をしました。

この頃では牛や馬がすっかり姿をけしてしまい、今の子たちの中には牛や馬の実物をみたことがないものがたくさんいると思います。市内でも今では乳牛や和牛もごくわずかになってしまい、よほど郊外へいかないとみられなくなってしまいました。

牛の飼育はオランダをはじめ北欧の諸国が盛んで、牧場でのどかに草をはむ美しい外国の観光写真などよくみかけます。日本では北海道が牛の宝庫です。

動物園でもよい子たちのために「おとぎのくに」に乳牛の赤ちゃんを展示することになっています。

牛ほど利用価値が高く、人に貢献している家畜はほかにありません。乳、肉、皮、骨さらにはその労力を提供するなど、その利用度に応じ多くの品種が改良作出されています。

世界中で有名な品種は20種余り、地方種などをふくめると何と500種以上の多くの品種があります。

牛の家畜化の歴史はかなり古く、学者によっていろいろの説がありますが、考古学的資料や化石などでみると、紀元前5000～2500年あたりではないかといわれています。

家畜化され、品種改良を加えられた牛がたくさんありますが、これには大別して二つのグループがあります。その一つはヨーロッパで原牛オーロックスから改良された家畜牛で、もう一つはアジア南部及びアフリカのコブウシの系統です。さらには野生や半野生の牛として、有名なバイソン、水牛、それにガウルやヤクなどがあります。ヨーロッパ家畜牛の祖先といわれるオーロックスは、古くにはヨーロッパやアジアの森林に何千万頭もすんでいましたが、長い間の森林伐採や狩猟などのために次第にその数が減って、1627年に最後の1頭がポーランドの公園で死んでしまい、ついに絶滅してしまいました。

牛は動物分類学では偶蹄目、牛科に分類されます

が、この科の動物として野生または半野生のうし、やぎ、めんようなどのほか、かもしかの仲間があります。

この科に属する動物の主な特徴としてあげられるのは、第一に蹄が前後肢とも二つに分かれているいわゆる偶蹄です。これは進化の道すじで5本の指のうち、第3、4の指だけがよく発達して、そのほかの指は退化、あるいは小さくなってしまったものです。

第二には一生のびつづける角が、雌雄ともにあります。これは毎年はえかわる鹿の角とは大きな違いがあり、頭骨の一部がのびた上に角質化した表皮が鞘状にかぶってできたもので、はえかわることはなく中は空洞です。このような角を洞角とよんでいます。

第三は特殊な歯の構造をもっています。草をかみきり、すりつぶすのに便利のように、上顎の門歯、犬歯はなく、下顎の犬歯は門歯状になり、臼歯はうす状で食物をすりつぶすのに適するようになっています。

第四の大きな特徴は四つの胃をもち、反芻(かみかえし)をすることです。これは一時に大量の食物をたべることができ、敵のいない安全な場所でゆっくり反芻しながら、これらの食物を消化することができます。これは彼らをねらうたくさんの敵に対して、武器をもたない弱い動物の自衛本能ともいえます。

このような特徴をもつこの科の動物たちは、粗食にたえ、生活力が旺盛なため南極、南アメリカを除く世界各地に広く自然分布しています。

当園に現在展示されている牛科の動物は意外に少な

く、にはんかもしかやブラックバックなどのかもしかの仲間と、やぎ、めんようなどの仲間にはすぎません。

春近くには世界的にも大へん珍らしく、貴重な動物の一つになっているヨーロッパバイソンが市民のみなさまにお目見えすることになっています。

バイソンは大別して、アメリカの草原にすむアメリカバイソンと、ヨーロッパの森林地帯にすむヨーロッパバイソンの2種類がありますが、どちらも文明の発達のための森林伐採や狩猟のため、次第にそのすみかを追われて、大へん数が減少してしまい、現在ではヨーロッパを中心とした各国政府や動物園などでの手厚い保護策の結果、かろうじて絶滅をまぬがれているのが現状です。

今度はるばるヨーロッパから輸入されるバイソンは、ヨーロッパで最も大型の哺乳類として、かつては繁栄をきわめていましたが、現在ではすっかり衰えてしまい、今では動物園やポーランド、あるいはコーカサスの保護地でしか見られないようになりました。日本では当園と名古屋市東山動物園にしかおりません。

亡びゆくこの貴重な動物を保護するため、1923年にはバリーでバイソン保護のための国際協会が設立されて、ポーランドなど東ヨーロッパの諸国は積極的にこの動物の保護にのりだしました。

また国際登録などもおこなわれるようになり、保護の普及とともに、この貴重な動物も次第にその数がふえてきつつあることは、大へんによろこばしいことです。(N 生)

北京動物園からの来訪

北京からジャイアントパンダが贈られ、東京・上野動物園に収容されたことは、すでに新聞などで御存知のことと思いますが、このジャイアントパンダにつきそって日本にやってきた3名の方々が、11月1日、当園を訪れました。

園長の案内により、約1時間にわたって園内を一巡した後、当園の職員との座談会がもたれました。

話題はもっぱらジャイアントパンダに集中し、当園側の質問にも、いちいちていねいに答えてくれました。そのうち、今までに新聞や書物であまりのべられていず、興味深かった内容を2・3紹介しますと……聴覚・視覚は鈍く、嗅覚は敏感であるが他のものに比べると劣る。木登りは上手で、泳ぐことができる。固定した巣はなく、冬眠の習性もないようである。妊娠期間は約4カ月で、子どもの数は1



〜2頭、時には3頭の場合もあるが、たいいてい1頭しか育たない。また、ジャイアントパンダの減少した原因としては、現在では人民政府が保護に努めているが、生息地付近の開発や、天敵(ヒョウ・ヤマイヌなど)、パンダ自身の問題(成獣になるものが少ないことなど)によると思う、とのべられました。約2時間にわたる座談会は活気にあふれ、将来、両動物園の間で動物交換を行なうことにより更に交流を深めたいとの希望がのべられました。(Y)

※ 動物豆知識 ※

『冬毛』

私達人間は、冬になると何枚も衣服を重ね着て、暖房器具で暖を取り、寒さをしのぎますが、野生のけものや動物園のけものは、どのようにして、このきびしい冬の寒さに耐えられるのだろうか。

それは、けもの多くは、冬になると丈夫で暖かい天然の防寒服（冬毛）を、身にまとうようになるので、私達が感じるほど寒くはな元気のものです。

けもの毛には、上毛という粗らに生えた長い毛と、下毛という多数密に生える細かい毛とがあり、冬毛には、この下毛の発達がよく、毛と毛の間に空気層を多く含みます。空気は熱を伝える力が弱いので、冬毛は特に保温力がよく、体温の低下を少なくします。

日本などの気温に変化のある地方にすむけものには、換毛（毛がえ）という生理現象が季節的におこり、夏毛と冬毛の区別ができます。

例えば、ニホンジカでは一年に2回換毛します。夏期には、明るい赤褐色に白斑のある夏毛におおわれますが、9月～10月になると、夏毛は退色して抜け始め、次々と抜け落ちます。その後、暗灰褐色の冬毛が少しずつ生えてきて、12月には完全に換毛し白斑もなくなります。この冬毛も3月には光沢を失ない下毛のかたまりが、綿の花のように浮き上がり抜けます。それと同時に冬毛の上毛も抜け始め、5～6月には新しい夏毛に変わります。

このような季節的な換毛には、3つの型があり、前述のニホンジカのように、年2回行なうものと、年1回行なうもの（秋になっても夏毛は抜けずに成長し更に新しい毛が発生して冬毛をつくる……ラクダ）そして全然行なわないもの（年中少しずつ抜けかわり、季節的な換毛はない……ラマ）とがあります。例にあげた動物たちは、この動物園で換毛が、比較的観察されやすいものです。他にはニホンカモシカの換毛が6～7月にははっきりみられます。

このようにしてけもの多くは、冬に向って換毛しますが、秋の間に栄養のある食物を十分に取らないと、冬毛への換毛がうまくゆかず、その上体内に脂肪やエネルギーを貯えられず、寒い冬を越すことができません。（K.M）

《できごと》

※10月9日

カバの子供が動物業者にひきとられてゆきました。この子供は、46年6月16日に生まれたメスで、誕生以来順調に発育してきましたが、このたび、他の動物と交換することになったのです。動物業者は、台湾の動物園に送るそうです。

※10月15日

明治31年10月15日、この日は京都市に市制がしかれた日です。これを記念して10月15日を京都市では自治記念日としていろいろな行事を行なっていますが、動物園では毎年無料開放をしています。今年は、14,182人の入園者がありました。

※10月29日

日本で初めて生まれたゴリラの子どもマックは、満2才の誕生日を迎えました。大きな病気もせず、ガールフレンドのミッチーと一緒にすくすくと育ち、体重は17.3kg、身長は約81cmにもなりました。

※11月1日

抱卵中のコクチョウが2羽孵化しました。孵化日数は、最終卵産卵後42日でした。

また、この日よりボイラーの運転を開始し、冬に備えての本格的な暖房体制に入りました。

※11月11日

ビューマのメスが死にました。このビューマは昭和42年来園し、2年後には子供を3頭うみました。その後しばらくして餌の摂取量が不安定となり、いろいろと手をつくしていましたが、ついに及びませんでした。解剖の結果、歯牙疾患がもとで餌の摂取が不十分となり、慢性貧血となって死んだものとわかりました。

※11月13日

「京都府の鳥」として親しまれているオオミズナギドリが、今年も南へ渡る途中に落下し、動物園に保護されたものが11月3日以降11羽にもなりました。そこで、この日、和歌山県有田市の海岸へ運び、放してやりました。（Y）

■ 第4号の発行は、4月1日の予定です ■